生涯現役を貫いたジャーナリスト、永井潤子さん

池永記代美（ベルリン・女の会）

永井さん（右）はwamの建設を構想した松井やよりさん（左）とは東京外国語大学時代からの友人。2001年12月ベルリンで「女性国際戦犯法廷」報告会が行われた時には、旧交を温めた。（写真提供：ベルリン・女の会）

ベルリン在住のジャーナリストで、女の会でも一緒に活動してきた永井潤子さんが、今年4月4日に88歳で永眠しました。その1週間前、ドイツ西部の州で女性州首相が誕生したのが嬉しかったのか、「この選挙結果について原稿書きたい」というメッセージが彼女から届きましたが、それは叶いませんでした。

永井さんは1958年にドイツ語学科を卒業し、ラジオ短波（現ラジオ日経）に入社してプロデューサーとして経験を積みました。しかし、4年制大学を出た女性は就職できたとしても30歳までに寿退職するのが普通だった当時、女性には能力給が適用されないという差別の壁にぶち当たって転職を考えていたところ、西ドイツの公共国際放送ドイチェ・ヴェレに採用され、1972年、38歳で西ドイツのケルンに移り住みました。

ドイチェ・ヴェレでは、年齢も国籍も、未既婚や子供の有無も関係なく、女たちが生き生きと働いているのに永井さんは驚き、勇気づけられたそうです。「自立して自主的に生きたいという女性たちの意識というか欲望が、あらゆる層の女性たちに広がっていったのが1970年代から80年代にかけての時期だったと思う」と、当時のことを著書『放送記者、ドイツに生きる』（未来社）の中で回想しています。そして、強くなり始めていた西ドイツの女たちと歩みを共にし、「自分自身も精神的に強くなった」、「自分の人生はドイツにきてから本当に始まった気がする」とまで書いています。

こうした体験から、どうしたら女性差別のない、女性が活躍できる社会が実現できるかが、永井さんの生涯のテーマの一つとなりました。それは1999年3月にドイチェ・ヴェレを定年退職してからも、NHK「ラジオ深夜便」のレポーターとして（2000年～2008年）、そしてそれ以降のフリージャーナリストとしての活動でも一貫していました。身近にいる女性たちには、経済的に自立すること、もっと欲張りになること、そして考え方が多少違っても連帯すべきだと、いつも説いていました。

もう一つ、永井さんが日本に伝え続けたのは、ドイツが過去と取り組む姿勢でした。ナチ時代の強制労働の被害者からの補償要求に対して、ドイツ政府と産業界が協力して補償基金を設立したことや、2000年にケルンから移り住んだベルリンの街で出会った加害の歴史を想起させる記念碑などのことを『新首都ベルリンから　過去から学ぶドイツ』（未来社）の中で報告しています。前掲『放送記者、ドイツに生きる』の中では、2008年のドイツ統一記念日にケーラー大統領（当時）が、「ドイツ人であることの良い面は何であろうか。それはドイツ人がみずからの歴史から学んだということである」と語ったことが大変印象に残り、日本の現状を思い浮かべると耳が痛いと記しています。そして、歴史的な責任を重層的に考える努力を続けるドイツと、負の過去から目を背ける日本は、本当に価値観を共有していると言えるのかと問うています。

2021年8月14日のメモリアル・デーに「ベルリン・女の会」が行ったスタンディングで、日本軍がマレーシアの人びとに与えた被害を読み上げる永井さん（写真提供：梶村太一郎）

1999年7月に「ベルリン・女の会」に入った永井さんは、「慰安婦」支援の活動にも参加するようになりました。和解を勧めるまやかしの言説や、被害当事者の意向を全く無視した日韓政府による合意などには非常に怒り、真冬でも真夏でも、体力の許す限り、支援行動に参加しました。

日本は同じ間違いを犯してはいけない、過去から学んで欲しいという永井さんの気持ちは福島第1原発の事故に対しても向けられました。この事故から3ヶ月後に、ドイツは2022年末までに脱原発すると決定したのですが、その決定過程やこれからの進捗状況を伝えたいと、「みどりの1kWh」というブログをベルリン在住の日本出身の女性たちと立ち上げたのです。永井さんはそのブログで、ドイツがなぜ脱原発を決定できたのかを理解するには、ドイツの政治だけでなく歴史や社会も知る必要があると、幅広い話題を取り上げてきました。

永井さんは「ドイツが脱原発を達成するのを見届けたい」と常々口にしていて、上記ブログでも「2021年末にドイツで3基の原発が停止し、残り3基、脱原発まであと一歩」と報告しました。その直後に末期癌が見つかり、帰らぬ人となった永井さんの代わりに、残された私たちが脱原発を見届けたいと思います。

ドイツを生き切った永井さん。樹木葬を希望し、5年前に亡くなった親友が眠るベルリン郊外の墓地の松の木の根元に遺骨が納められた（写真提供：梶村太一郎）